

われわれの経験を構成する要因(エレメント)を析出するのはきわめて理論的な作業である。それは物質のエレメントとして素粒子を考えるのが高度に理論的であるのと同様であるとも言えるだろう。しかし、それにもかかわらず、松永さんは主として経験をつぶさに観察し、いわば現象学的に記述することによって経験のエレメントにスポットライトを当てようとしているように、私には思われた(私の誤解かもしれない)。そのため、その記述には随所に無理が生じていると思われる。その観点から、色について、体について、空間についてと、三つの話題をとりあげて批判的に検討したい。

(1) 色について。松永さんは、色は「物、光、色を見る人自身、これらのすべてが関係することで発現する何かである」と言う。しかし、これは色と色経験を区別し損ねた主張であるように、私には思われた(私の誤解かもしれない)。他方、色と色経験を区別することは重要であると私は考える。そして色そのものには「見る人」というエレメントは関わらないと言いたい。

(2) 体について。松永さんは、体を価値づけや存在の意味の基盤として捉える。そして、そうした主張を経験記述のレベルから立ち上げようとするために、「自分の体を経験する」ということを基本的なものとして提示する。例えば、「見ることに目の感覚が伴うことが、他ならぬ私が見ているのだ、ということ告げる」などという指摘もなされるが、私にはこれはまったく事実と反すると思えない。

体を経験のエレメントとして取り出すのは正当なことであるが、それはけっして体の感覚がすべての経験に伴っているといったことではないだろう。

(3) 空間について。松永さんは、原初的な空間経験から成熟した空間経験へという発生論的な議論をしているように思われる。つまり、ここでも体の場合と同じように空間は経験されるものとして捉えられているようである(この点が一番私が誤解している可能性が高い)。だがそうだとすれば私はそれに反対したい。空間はなるほど経験を成立させるエレメントではあろうが、それはけっして空間自体を経験するというのではない。空間を経験するありかたとして、松永さんは原初的な空間と成熟した空間を区別するが、私にはその区別に意味があるようには思えない。